

ソーシャルワークの源流

前 田 敏 雄

一 人が生きるということ

誰でも人は、此の世に生をうけたからには、その生命を大切にして、その生を全うしたいものである。人の生命を大切にすることは、古今東西の生活の大前提である。この生命を大切にして生きるということ、根幹として福祉ということが成り立つ。しかし、現実には、これがなかなかうまく行かないことが多くて、戦争、飢饉、不況、病気、貧困、虐待、失業、不和、天災地変等々で、生命の尊厳が危まれることも多い。そこで、人々がそれぞれこのような悪条件にうちかかって自分の人間としての可能性を最大限に発揮するにはどうしたらよいかという福祉構築の努力が始まる。

ひとりの人間には、必ず両親がいる。そしてその両親にもそれぞれ両親がいる。そしてそのまた両親にもそれぞれまた両親がいる。このようにして極めて単純に計算しても三十世代を超えるころには、悠に五三億人を超す人数となる。一代を三十年としてもたかだか一〇〇〇年くらいの間誰でもこのように多くの人の生命がかかわり、そのうちどのひとりの存在が欠けていても、ひとりのその人は此の世に存在しなかったことになる。

さまざまな類人が此の地球上に出現して数百万年もの間に、そのうちからこんにちの人類が生き残ったのであろうが、このように生物と

しての私たちは、大へん多くの人々の生命をうけてこんにち生きているのである。しかし、生きるのはそれぞれ本人ひとりひとりである。人間は、多くの動物のように生得的本能によって生きているのではなく、学習によって生きたるころが大である。学習したりする生きる営みの基本は、ひとりひとりの努力であり、ひとりひとりの自分を意識したとりくみである。

二 福祉を構築する方法としての自助、共助、公助

人は普通、赤ん坊の時から這い、立ち、歩こうとする。親は、これを支持しやがて赤ん坊自ら行動するようになる。食べることで着衣でも次第に自分でできるようになる。このように、自分で工夫して努力することを自助と云っている。

しかし、他者と共に協力して自分たちが生きることを支えていくことも大切である。親子、兄弟姉妹など家族、友人、知人などで互に支えあい助けあっていく営みを共助という。出来るだけ自分のことは自分でということと共に、この共助によるお互いの生きることを支える方法は、遠く人類の歴史の始めから存在した。外敵や自然の脅威から身を守るだけでなく、狩猟と漁撈、採集や栽培に共助は必要不可欠のとりくみであった。そして子孫を産み育てるために、何よりも男女の永続的な協力がなくてはならなかったのである。

こんにち、ボランティアやチャリティの必要が云われているが、これらは、基本的に各人の自由意志にもとづく共助の形態である。原始の時代から人間の歴史を通して、人がその生活を支えてくることが出来たのは、自助と共助という二つの方法によるものであった。

ところが、人が人を支え助けあう第三の方法が出現した。これが、こんにち社会福祉と称されるもので、人々がそれまでの自発性や情誼に加えて、国民国家を經營して法律や制度という社会のシステムによって連帯していきこうというものである。したがって、これを公助とよぶのが適當であろう。

三 公助発達の時代背景

十八世紀のヨーロッパ、イギリスの産業革命は、国民国家の形成とともにそれまでの人々の生活の在り方を大きく変えるものであった。農業や牧畜、漁撈採集の生活から蒸気機関の發明によって大きな工作エネルギーをとり出すことに成功したのである。従来も人力に加えて、牛馬の力や水車や風車の利用はあったが、移動可能で大きな力を継続してとり出すことの出来る便利な方法を入手したのである。これによって金属の鍛練や綿や羊毛の加工工場等が新しい動力で稼働し始め、鉄道網が付設されていった。人々は、これらの新しい動力のもとで働いて収入を得るために伝統的な村から働き易い都市へと移り住んだ。

人々の生活は、しかし、産業の景気や不景気だけでなく、健康や生活周期によっても調子の良い時と悪い時とがある。こんにちのような健康保険や失業手当制度などの整っていない時代のことであるから、病気になるったり老令の労働者はまっ先に失業へと追い込まれた。当時の児童の労働者は、読み書きを覚える時間も学校も不備であったし、

十分に栄養のある食事を摂ることも出来なかった。睡眠もままならない有様であったことは、英国だけでなくわが国でも時代は下るが女工衰史等によってよく知られているところである。当時のヨーロッパ、わけても英国についてはC・ディケンズの二都物語等で知ることが出来るし、セツルメント運動の記録や、二十世紀になってからでもアメリカに移住したC・チャプリンの自伝等によって、都市の下層社会の有様を知ることが出来る。世情を伝える資料文献はそれこそ枚挙にいとまがないほどである。

英国一八六九年の慈善組織協会 (Charity Organization Society) の成立は、伝統的な農業を中心とする社会から新しい産業社会への過渡期に出現した相互扶助組織のあり方を示している。また、チャーチスト運動は、貧民にも選挙権を要求する運動として記憶されている。このような経験を通して、人々は、人それぞれ自己の人間としての可能性を最大限に發揮するためには、自助と共に共助が大切であり、これに加えて民主的な公助のシステムが重要であることに気付いたのである。

四 福祉の方法としてのソーシャルワーク

ソーシャルワークは、福祉の方法として知られている。ソーシャルワークを社会福祉方法論と云い換えているのを見かけるが、これは大へんな誤りである。先に述べたように、社会福祉とは公助のことであるから、文字通り社会福祉方法論と云うならば、その内容は有効適切な社会保障中心のシステムの方法論ということになる。しかし、ソーシャルワークの意味するところは決してそのような狭いものではない。

ソーシャルワークは、その発展の過程からケースワーク、グループ

ワーク、コミュニティオーガニゼーションというふうに説明されている。そして、それぞれが共通にしている認識は、人間は環境によって生きるということである。つまり、ソーシャルをここでは社会と訳さず、環境と意識するわけであるが、ソーシャルという語は、日本語にこれを移す場合、その意味内容にほぼ注意しないといけない。

五 ソーシャルワークの構造

ソーシャルワークは、人が人を援助する方法ということであるが、それは、どのような意味においてであろうか。人間は、この世に生を受けたからには、その生を全うしなくてはならない。できるだけよい人生を送ることを誰でも志さそうとするのであるが、そのためには、環境を大切にしなければならぬ。ソーシャルワークを環境事業（仕事）と訳したが、環境のうちでも特に人を取りまく人間環境、すなわち社会は重要である。

何故、環境を問題にするかと云えば、それには、適応ということをとりあげなくてはならない。福祉とは、環境とのよりよい適応関係をみなでつくることであり、そのことが人の可能性を發揮、発展させるものであるという考えである。

人が人らしく生きる条件としての生活環境の重要性をソーシャルワークは主張し続けてきた。

周囲とのさまざまな関係なしにひとの存在を説明することは出来ない。ただ単に存在にだけでなく、その在り方を説明することもできない。

たとえば、快適に生活するために暑さ寒さなどの気温のことが気になる。これは単にその時の快適さだけでなく、ひき続く事態を追求していくうえでも影響してくる。そこで、寒ければ暖房を工夫したり、

衣類を多めに着こむなどして寒さに対処しようとする。またその自身が身体を鍛えて、寒さに馴れたり耐える訓練をする。いづれにしても極端な事態には対応できなくても、このように環境に工夫をこらしたり、自らの在り方を合わせるようにしてしのぐことが出来るのである。衣食住についてだけでなく、環境としての人間の存在も、生活の不快に影響するところ大である。家庭外での学校や職場における人間関係はもとより、本来憩いと安心の場である筈の家庭内においても夫婦間の暴力や児童虐待がある。小学校や中学で不登校を起こしている子どもに、その理由を聞くとその子が周囲に受け入れられず、孤立し、いじめられているなどの返事がある。環境としての人間関係は、人に希望や和みや生きる力を与えるものであるが、他方、苦痛や絶望を与えるものでもある。

六 環境の概念

人間にとって生活環境とは何かということを考えておくことは、大切なことである。生活環境には実にいろいろなことが関係している。地域、家族、家系、人種、学校、職場、宗教、衣食住等々すべて生活環境を形成している。四季折々の気候、寒暖、湿度、日照、静けさ、乗物の乗心地、騒音がどうかということも関係している。会いたい人、一緒に居たい人も環境である。現在の現実ばかりでなく、過去の思い出、経験、将来の希望、望みもその人を取りまく環境である。また、当人の身体も環境としてとらえられるものである。大人になってから子どもの頃の写真をみて感慨にふけったりするのは、その姿かたちの変化である。病気になるって患部を悪い環境として手術して切除することもある。髪形をかえてみたり爪を切ったりするのは、身体を自分を形成している環境としてとらえて手入れするのである。身体と

当人とは不離の關係にあるが、このようにしてみると身体は、時にはとりかえ可能で操作可能な變化していく環境としてとらえることもできる。

それでは、環境に対する本当の自分とは何かということに思いめぐらしていくと、それは、考える自分、自分を自分と思う心、心こそが自分というように考えられるかも知れない。しかし、心は身体のはたきのおかげにあり、心だけで私たちは生きているわけではなく、さらにまた、心のはたきの中には記憶という機能があり、記憶は環境を形成する。それと同時に予測や希望も環境としてはたらくのである。

人間は、その場その時の状況にただ単に反射的に反応して生きるのではなく、状況に適応して自身を処するために、経験や予測等も総合的に総動員しているのである。状況認知も五感の能力を最大限に働かせて対処しようとするのである。

精神の病気に統合失調症というのがある。現象的にみて、その生活が当人の幻覚、つまり、聴こえていない筈のことが聴こえるとか、見えない筈のものが見えるとか、嗅つてこない筈の嗅いがするとか、味覚が変わったり、皮膚の触感がわからなくなったり、東西南北や地理感覚等の見当識、記銘力、記憶力に障害を来し、これによって判断力にも支障を来し、普通の生活が営めなくなってしまうものである。

論理の矛盾に全く気が付かない妄想の世界に入ったりして現実認知から外れてしまうこともある。これらは、てんかんや薬物依存、ホルモンバランスの障害、怪我等によっても起きる。また、感染によるものでは、たとえば若い時に梅毒にかかって治療を受けたが根治しきらないで長い潜伏期を経て、その人が中年になり、働き盛りのいわば人生のまっ昼間になってありもしない莫大な財産があるとか、自分には天才的な能力があるとかということを出して人がかわった様にな

り、他人が論しても全く聞き入れようとしないで実生活を破たんにあちびき、周囲の訴えでよく調べてみると、梅毒性の進行麻痺による精神活動の高揚期であることが発覚して、即、入院となった事例もある。放っておけば、神経活動はやがて破壊されてしまうわけであるが、芸術活動等で一時的に能力を評価された人もいる。

要するに、人はそれぞれの環境とのかかわりの中で感覚し自己統合して生きているということである。人生の各時期、たとえば乳幼児期、少年少女の時期、青年期、壮年、中年の時期、老年期の環境のうけとめ方、世界観はそれぞれがうし、それぞれ大たいの傾向はあっても個別的にはまたちがうわけである。

七 対人援助のあり方

個人であれ集団であれ、周囲の環境との相互関係を調整し、相互の適応を計ることは、きわめて大切なことである。この場合、環境について、体系的に整理して、個人にとってあるいは集団にとって環境とは何かということを示すことは、ほとんど不可能なことである。そこで、だいたい環境にはどのようなものがあげられるかを示すことはできても、実際には実情に応じて考察していくことになる。

そして、さらに、環境と人との関係を改善していくに当って、福祉の見地からは、人の主体性が尊重されることが大切である。これは、人が生きるのには、意志して生きること、別の言葉で云えば、人は自分の行動に責任を負って生きる存在であり、他者の云いなりになったり、操られて生きる存在、自由を奪われた奴隷のように生きる存在であってはならないのである。

また、その行動は、社会的見地からみて妥当であるようにすすめられることが大切である。これは、人間の存在は、社会的に生きていく

存在であるから、いくら個人的に環境との関係の改善を求めるからと云って、独善的であってはいけないというのである。自身の行為が周囲からみて適当とされるようになってはならないということで、周囲の状況によって配慮されることが大切であるということである。

そして、欲求解決に際しては、総合的、全体的見地に立ってなされることが大切である。これは、人の存在は、社会的に多面性をもって生きていくことが自然であるから、たとえばその役割や期待ということからみても、望ましいことや望ましくないことを見きわめて行動することが大切であるというのである。家族関係の調整などで、在る女性が、夫婦関係はよくても、母親として母親の役割がうまくいかないとか、近所付き合いが悪いということに困るというような相談がある。何を優先させるかということと同時に、出来ることならすべてを上手に満足させることはできないものかということが問われるのである。

さらにまた、環境との関係の改善に際しては、現実的であることに留意することが大切である。時間的にも経済的にも現実的であるということが既に問題解決の第一歩を踏み出すことになる。ソーシャルワークの援助に当っては、この主体的見地に立つこと、社会的見地に立つこと、総合的見地に立つこと、現実的見地に立つことに留意してすすめられることは、これが人間性に深く立脚していることを示すと同時に、このようなソーシャルワークの文化を受けいれるかどうかが福祉社会を構築するうえで問題とされるのである。

八 福祉の方法と教育の方法

人間は、一方的に環境の支配を受けるだけでなく、自分の都合の良い様に環境に働きかけて環境を変革させていく力を持っている。さらにまた自らを環境を受け容れ易く変化させていくものでもある。人間

の環境への適応はよりよい適応が、さらに次の可能性を開くことになる。不適応は、よりよい適応が出来るような努力を促すことになる。しかしあまりにも苛酷な不適応の状況では、当人は環境改善や自己変革のための力を空しく浪費することになる。

艱難汝を玉にす(かんなんなんじをたまにす)という言葉があるが、病人や高齢者にこの言葉は適当ではない。早く痛みや苦痛をとり去ることが大切なのである。病氣や怪我で苦しんでいる人に対して、その痛みや苦しみはあなたを高めるとは云わない。その原因のいかんを問わず苦痛をとり去ることに力を尽くさなくてはならない。しかし、体力や精神力が回復してきた段階になると、次なる状況にも容易に耐えられるようにリハビリテーションへとみちびくのである。

福祉の方法は、従来、福祉活動の対象は生活上さまざまな負荷を負っている者が多く、無知、貧困、無力等の社会的弱者であったことから、その援助は、重荷をおろして、休ませ、施しをすることによって元気を回復させようとするものであった。福祉活動の出發は、弱者をいたわり恵みを与え施しをすることであった。慈善活動や救済活動がそれである。

たとえば、これに対して学校教育の現場では、教師が生徒に知識を授け、体育や徳育を指導し、教科を学習させ問題を解かせ、宿題を課するなどして、生徒の能力を開発し増進させようとするものである。福祉も教育も共に人の生活力を高め人を生かすことを目指すのであるが、概して福祉は、対象に恵みや休養を与えることによって強加を計り、教育は負荷を課すことによって対象を鍛え強めようとするものであると云えよう。

九 福祉問題の所在をいかに把握するか

福祉は、人間が心地よく生きるための努力であり、実践である。人間は、現在と未来を生きていくのである。現在を心地よくすることは、未来を心地よくすることに繋がるし、未来のために現在を工夫するということになる。心地よさというのは、個々人の感じ方であるが、各人ばらばらであるかという点、そうではなくてほしいという傾向というものがある。主観的であるが客観的に把握することも出来るのである。これは、地域、時代、文化、年令、男女別、生活のしかた。職業等々の状況によりさまざまである。過去に生きるということも云われるが、過去つまりその人なり集団なりの経験や思い出を環境として現在と将来を生きていくわけである。

福祉の必要は、どのようにして知られるのであろうか。これは、その人の、あるいはその集団なりの欲求として知られるのである。人生は、欲求の充足の連続であり、そのための課題解決過程であると云っても過言ではない。ひとつの欲求、ひとつの課題が解決するとすぐまたその次の欲求なり課題が立ちはだかるのである。この欲求なり課題なりの性質というものは、ことごとく自己と自己をとりまく環境との調和や適応を計ることや、関係の改善を計ることで一応の決着がなされていくわけである。

欲求を生じる解決課題は、つねに個々具体的であるが、その性格を抽象すると、基本的には、①自分が、生きていくこと、存在が認められること、生命を大切にできることである。この他に、②愛し愛されること。③新しい変化を経験すること。④安定することなどが云われている。(C・トウル) 人の生活困難の解決を援助するソーシャルワ

クの実際において、援助者は被援助者と以上のような観点を忘れずに接することが大切である。人は往々にして、その存在を期待通りに認められないことや、自分を大切に扱われないこと、緊張や不安定であることに強く不満を持っているものである。これは、人間関係においては云うまでもなく、物質的、物理的係わりにおいても同様である。このような緊張や不安定から解放されることによって、ああよかった、としあわせ感を抱くことが出来るのである。

まとめにかえて

人が生きていくのは、環境とのかかわりのなかであり、ソーシャルワークは、福祉の方法として生活困難をかかえている人(クライエント)の問題解決の援助をするのであるが、それは、援助者であるワーカー自身もクライエントの、問題解決的人格環境として対処していくことである。

参考文献

- 前田敏雄他、現代教育の点検と人間形成、福村出版、一九八〇
- 小松源助、シャロット・トウル、コモンヒューマン・ニーズ、中央法規出版、一九九〇
- 小松源助、メアリー・リッチモンド、ソーシャルケースワークとは何か、中央法規出版、一九九一
- 小松源助、ソーシャルワーク理論の歴史と展開、川島出版、一九九三
- 前田敏雄他、社会福祉Ⅰ、東京書籍、一九九六